

小説

椿の木の下の下

ゆとり 満

「お父さん、何を見ているの」
背後の突然の声に賀津彦は「おっ」と声を上げ、身体を後ろにねじった。

「直人か、びっくりしたよ。どうしたんだい」と言いながら組んでいた腕をほどいた。

「うん、おばあちゃんが三時のお茶の用意ができたからと言っているよ」

「そうか、そう言われると小腹が空いたな。仙台に来ると空気も、水も、お米も、野菜もみんなおいしいか食欲が旺盛になって来るんだな。直人はどうだ。やっぱりおとうさんと同じか。お八つはなんだろうね。さっ、行こう」

持ちになってね」

「そうか、昔の事を懐かしんでいたんだね」

「懐かしむと言えばそうかもしれないね。でも、懐かしむという表現じゃちよつと足りないかなあ」

「微妙っていうことか。それで難しい顔をしているように見えただね」

「微妙なんていう言葉をうまく使うね」

「この言葉は学校でもみんな使っているよ。はやり言葉さ」

普段の直人に比べると饒舌と言ってよいほどの話しぶりであった。環境が変わり学校や授業、友だち関係などのプレッシャーから解放されたからかもしれない。賀津彦は直人を連れて来てよかつたと思った。

直人はこの四月、四年生に進級して直ぐに不登校になってしまった。普通は一、三、五年生はクラス替えのない持ち上がりで、担任も原則替わらない。ところが直人たちの三年生は年度末に転入児童が数名あつて三学級の基準児童数をわずかに超え、急に三クラスから四クラスへの学級増となった。担任も変わってしまった。「子どもは純粋」という見方が多い。そういう面も確かにあるが環境によって極めて残酷な行動に走ることもある。直人の内向的で色

「お父さん、今、腕組みをしてなんか難しそうな顔をしてたみたいけど」

父親の急くのを制するように言った。

「難しそうな顔をしているように見えたか。直人もなかなか観察力が鋭くなつたね。実は、子どもの頃のことを思い出しながら周りを見ていたんだよ。仙台の実家に帰って来る度に周りの景色が変わっているだろう。お父さんが直人の年齢の頃はこの家の東側は全部畑で、後ろは田んぼだったんだよ。畑も田んぼもおじいちゃんが仕事の合間に耕していたんだ。それが畑はアパートや住宅になってしまい、田んぼは駐車場に変わってしまったよ。なんだか寂しい気

白のところがひ弱さに見えたのであろうか。弱さは攻撃の対象になりやすい。そんなことも発端になったのだろうか。四年生に進級してすぐに直人はいじめの対象になってしまったのである。その行為があまりに露骨であつたためにすぐに担任に知れ、担任から賀津彦夫婦にも連絡があつた。早期の対応で大事にならないうちに改善するだろうと担任も賀津彦たちも樂觀していた。ところがそれは甘かつた。いじめは止まず、露見したことで逆に陰湿で巧妙になっていったのである。直人は次第に登校を渋るようになった。

七月初め頃には教室にも入れなくなり、二学期九月からは保健室登校となつてしまった。しかし、幸いなことに学習意欲は旺盛で、母親が買い与えた問題集を次々に解いていった。既に四年生の学習内容を終え、五年生の問題に取り組むほどであつた。また、読書も大好きで、日本歴史や偉人伝などを読みまくっていた。従つて、国語も算数も同年齢の子どもたちに比べかなり理解が進んでいた。共働きの賀津彦夫婦は多忙さで直人を十分にケアすることができなかった。むしろ直人の学力の高さに安堵感を持ち、不登校の改善については学校に任せてしまつていた嫌があつた。それでも、この先の繁雑な人間関係を含む社会生活を考えたとき、円滑な人間関係を持つことは極めて重要であ

る。それは賀津彦も彼の妻も日々実感していることであつた。むしろ知識や学力よりも対人関係の能力を求められることの方が遥かに多い。このことを考えると、賀津彦たちは暗澹たる気持ちに襲われるのであつた。

こんな折に高校のクラス会の知らせが賀津彦の元に届いた。卒業後二十年を記念し、担任を囲んで盛大に執り行われる、というものであつた。賀津彦は無沙汰の墓参りの良い機会でもあると思つた。級友や恩師に会いたくもあつた。それで早々に出席の返事を出していた。この仙台行きに直人も連れて行く話が夫婦の会話に上つた。直人を同行することは賀津彦の母も喜び、また、不登校の改善につながるかもしれないという淡い期待があつた。問題は息子のことであつた。土、日を挟んで四日ほど自宅を離れることになる。一人っ子で母親っ子の直人が素直に承諾するかであつた。ところが両親の思惑など意にも介せず、大喜びで承諾をしたのであつた。

「おとうさん、その椿の木のことだけどき、だれが植えたのかな」

直人の目が大きく見開いていた。彼が物事に興味関心を抱いたときの表情であつた。

「百年以上も前のことだからなあ、年数から逆算するとおが埋め込まれているのである。こんな感慨を振り払うように、」

「椿は強い木でね、しかも常緑樹だから。常緑樹って知っている？」

賀津彦は強いて明るい声で言った。

「もちろん知っているよ。一年中緑の葉っぱをつけている木のことでしょ」

「直人は随分と物知りなんだね。驚いたよ」

「そのぐらいのことは四年生だったら大概の子は知っているさ。僕の場合は、授業に出ているからその分たくさん本を読めるので、自然と知識が増えているんだ」

「普通はさ、授業に出ていると知識が増えないというけれど、直人は反対か。そうか、不登校もメリットがあるんだ」

賀津彦は直人の意外な言葉に驚かされた。直人は自分の置かれた状況を無駄にすることなく有効に使っていたのだ。十歳の子もおいそれとできる行為ではないと思つた。

「メリットと言ったら先生に叱られるよ。僕ら小学生は学校に行き、授業に出なければならぬでしょう。そのため先生たちも一生懸命僕のことを面倒見てくれているんだから。保健室の先生には特にお世話になっているんだ。僕

じいちゃんのおじいちゃん、おとうさんのひいおじいちゃんが生きていた可能性が一番高いかな。おじいちゃんが生きていた間に聞いておけばよかつたんだけどね。今にしてみれば残念であり、惜しいことをした」

「後悔先に立たず」というが、父から聞き漏らしていたことの多さを賀津彦は改めて知つた。

「農作業をしていると必ず午前と午後それぞれ一回の休みを取るんだよ。大概午前十時と午後の三時ごろだけ。午前は『お茶にする』と言うし、午後は『タバコにする』と言う。午前は本当にお茶一杯でお仕舞い、午後のタバコは三十分間ぐらいの休憩、お茶や腹の足しになるような煎餅や漬物が出されるの。この休憩時の絶好の場所が椿の木の下のつたんだよ」

と言いつつ、父と母に交じりネギを植え替えた中学校二年生の夏の暑い日盛りの光景が賀津彦の脳裏に浮かんで来た。そして、無口で、働き者の筋骨たくましい父の姿が目についた。その父も二年前に亡くなったことを思い浮かべると胸を衝かれ、自ずと目頭が熱くなつていった。アパートや住宅の住民だれ一人としてかつてこの土地が、幾世代にも渡り農夫たちが営々と耕し、守り続けた所なぞとは夢にも思わないうら。何気ない風景や土地にも歴史

は先生方にすごく感謝しているよ」

賀津彦はぎくりとなつた。「もしかして、この子はいじめからの回避を知っているのではないか、しかもいじめを利用して、自分に都合の良い生活を手に入れようとしているのではないのか」とさえ思つた。一瞥すると、さらりと言つてのけた直人の色白の表情にはなんの変化もない。親の眞面目と思いつつ「直人の成長と」賀津彦は思い込むことにした。その思いが、ためらつていた直人への問いを軽くした。

「じゃあ、いじめは少なくなったのか」

直人が少しの間を置いて賀津彦の顔を見上げた。黒い瞳がじつと直人の顔を見詰めている。平穩に見えた表情が暗くなつて来た。賀津彦はしまったと思つた。

「あいつらはクソだよ。僕の顔さえ見れば『白ブタ』とか『豚汁』とか悪口を投げつけてくるんだ。この頃は慣れて聞き流しているけどね。それが奴らにはおもしろくないらしいんだ。僕が泣けば満足するんだらうけどね。あいつらの思い通りにはならないって決めているからね。絶対僕は負けないよ。それに学力では学年で一番だからね。勉強で奴らを見返してやるんだ。おとうさん、もう僕のこととは心配しなくていいよ」

「そうか、安心したよ。でも、おとうさんもおかあさんも直人の力になれずごめん」

「そんなこと気にしないで」

直人は先ほどの鋭い視線は何事もなかったように消え去っていた。

「その椿ってどのくらい大きかったの」と、笑顔さえ浮かべて尋ねてきた。

「根元辺りの幹の太さはおとうさんの両手一抱えに少し足りないくらいで、高さは十五メートルだったかな。さっき言ったように樹齢百年は経っていたと言われてたんだ。子どもたちの大好きな遊び場でもあったんだ」

賀津彦は救われるような気持ちであった。

「へえ、おもしろそうだね。花も咲いたの」

直人は興味を募ってきたのか矢継ぎ早に質問をしてくる。「赤い花がいっぱい咲いたよ。紙コップ半分ぐらいの小ささで外側に赤い花びらが取り巻き、中にめしべ、おしべの花芯があるんだ。それがとても鮮やかな黄色なんだよ。こんもりとした濃い緑の葉の生い茂る中にまるで星がきらめいているように咲いていたんだ。今も目に浮かんでくるよ」

そう言った瞬間、賀津彦の胸の奥にキリリとした鋭い痛

いるかのようなであった。あの日から既に二十七年の歳月が流れていた。

「もちろん、いじめなんかなかったよ」

間を置いて何とか賀津彦は答えた。しかし、苦し紛れのその声には力がなかった。「メイタク」と心の内で呼んでみた。胸に苦いものが広がっていくだけであった。「ごめん」という謝罪の言葉は、二十七年前に果たして置くべきであった。「いじめはなかった」などという嘘の言葉はさらに自身を苦しめるであろう事は明々白々である。罪を成し、その罪を隠し、さらになかったものとする卑怯さは許されるはずもない。弾みだった、という言い訳は傲慢さの裏返しでもある。嘘を続けるよりは素直に謝罪すれば一時の恥で済む。しかし、その一時の恥に堪えられずに嘘を重ね、さらに罪を深くしていく。愚かさから免れ得ない己が哀れでもある。

明徳は既に二十数年も前に日本を離れ、国交のない北朝鮮に帰国してしまっていた。もはや詫びようにも詫びる術がないのである。それだけに申し訳なさ募るのであった。賀津彦は彼が健康で無事であることを祈らずにはおられなかった。

「おとうさん、おばあちゃんが玄関先に出て、おいで、お

みが走った。

赤い椿の花であった。そして、その下で俯いたままじつと立っている子の姿が浮かんで来たのだ。

「じゃあ、その椿の木に登ったりもしたんだ」

賀津彦の意識は一瞬過去へ飛んでしまっていた。

「おとうさん」

直人が語調を強め、そして、賀津彦の袖を引いた。

賀津彦は、あつと思ひながら「木登りね、そつ、毎日したよ。この椿の木は、私たち子どもらのお城のようなものだったからね。みんなそれぞれ自分の枝があつて、名前まで付けていたほどだから」

「いいなあ、いじめなんかなかったんでしょ」

賀津彦は直人の問いにぐつと詰まってしまった。やはり直人はまだいじめの現実には絡め取られていたのだ。学校から遠く離れたこの仙台の地にいてもいじめの呪縛から逃れることはできていなかったのだ。「哀れ」という気持ちが過ぎると同時に、賀津彦はその「いじめ」という言葉に奈落へ引き込まれるような思いがした。

俯いて立ち竦む少年、明徳の姿が眼の前に現れたのである。賀津彦たち仲間が寄つてたかつていじめた相手であった。そして、今、息子直人の口を借りて賀津彦を糾弾して

いでをしているよ」

直人が振り向いて呼びかけるその顔は明るかった。その直人の先の開いた玄関口から飼猫のトラが玄関口から飛び出し、尾を立てながら庭のツツジの茂みにゆつくりと入り込む姿が見えた。四代目赤トラである。立てた尾つぼがまるで直人を励ましているようで、賀津彦は何か救われたような思いがした。

その日、見通しの利く広い畑の真ん中に立つ椿の葉陰に四、五人ほどの子どもたちが見え隠れしていた。その中に賀津彦もいた。彼は他の子どもたち同様に、もぎ取った椿の赤い花を下に向かって投げつけていた。その先には明徳が背を丸め、俯いたまま立っていた。

と、「チョウセン、チョウセント、パカニスルナ、オナシコメノメシクツテ、トコチカウ」と地面に向かって叫び始めた子がいた。賀津彦の一学年下、三年生の透であった。たどたどしいその言い方がいかにもわざとらしくかった。他の子どもたち二、三人程が嘲りの笑い声を立てた。

透が明徳に投げつけたその言葉は明徳の父、金春さんが四、五日前に明徳をいじめていた子どもたちをたしなめた口調とそっくりであった。子どもたちの嘲りは金春さんに

も向けられていたのであった。父親に言い返せなかった分を明德に向けていたに違いない。明德の首はさらに深く垂れ、身体も縮こまっているようにも見えた。屈辱に心も潰れる思いに違いなかった。賀津彦は明德の苦渋を思うといたたまれない気持ちになった。また、「透はやり過ぎである」とも思った。しかし、一学年下の透なのに「止める」とは言えなかった。言えば「いい子ぶっている」と攻撃され、仲間外れにされることを恐れたからであった。

金春さんは在日朝鮮人で「かねはる」という日本名を持ち、彼を知っている人たちは「カネさん」と呼んでいた。彼の家族は賀津彦の自宅の裏にある新井さんの借家に住んでいた。借家と言っても一軒家ではなく、新井さんの家の北側の壁にへばりつくように建て増された部屋のようなものであった。賀津彦の土地ではこれをサツカケとよんでいた。「さ」は強調の意の接頭語、「かけ」は「掛ける」、架ける、懸ける」であり、「小屋掛け」の「掛け」と言えば分かりやすいであろう。臨時的で簡易の小屋風の造作である。間口は一間、奥行きは四間で窓もないウナギの寝床のような造りで、部屋の中は十ワットの電球が年中点いていた。

家族は日本人の奥さんの小林香さんと息子の明德との三

たのである。そのことは周りの子どもたちは知らないわけではなかった。それを知りながら自分たちの仲間には入れようとはしなかったのである。しかも、完全に排除するわけでもなかった。排除はしないけど近づけもしないという微妙なバランスを取っていたのである。何かの弾みでいじめを波及されたときの逃れる口実として、また、からかいの対象として保持しようとする狡猾さでもあった。いじめには一種の快感というものが存在する。相手が泣いたり、悔しがったりすることが心地よいとする感情である。加虐的快感とでも言えるもので、特に集団の中で見られる。また、集団仲間の共通の敵を作り、集団仲間の結束を果たすという働きである。残念ながら子どもたちにもこういう現象が見られるのである。子どもだからと言って必ずしも純真とは言えない。子どもたちはその都度その都度おとなたちの行動や考えを見、まねているのである。環境が意識をつくるのである。

ある日のことだった。いつものメンバーの子どもたちがメンコをしていた。離れて見ていた明德がじわりじわりと距離を詰めてその集団に近づいて来た。二層ほどの声掛けにはちょうど良い距離になったときである。だれとなく「チョウセン キタネエカラ コツチサ クルナ シェツ、

人であった。香さんの実家は賀津彦の自宅から徒歩十分ほどの神社近くにあった。香さんは両親や親族らの挙つての反対を押し切り結婚したのであった。そんな事情で実家は絶縁状況であった。明德は透と同学年の三年生であった。明德はみんなから名前のとおりメイトクと呼ばれていた。父親に似て背が高く、学年の中でも一、二を争うほどであった。しかし、痩せてあばら骨が浮き出していた。そのせいか手足が異状に長く見えた。また、皮膚が全体的に黄色みを帯びていた。周りの子どもたちと微妙に違う風貌も一つ一つのいじめの要因になっていたのかもしれない。当時の賀津彦の住む村落は旧弊がまかりとおり、転入者に対しては表面では愛想笑いで対応しながらも裏では「余所者」扱いをし、村落の役員や年にくつか行われる祭りなどの行事の役職などに決して就かせなかった。従って、在日朝鮮人や韓国人対しての差別や偏見などは陰に陽にあった。

そのような環境であったから、自然、子どもたちもこの雰囲気に染まっていたのはやむを得なかった。そんな訳で子どもたちの明德に対するいじめも日常的であったのである。しかし、そんな状況でありながらも明德は子どもたちの遊びの輪の中に加わるうとしていた。子どもは孤立を恐れ、群れたがるものなのである。明德も友だちが欲しかった。

「シェツ」と手振りを交えて悪たれ口を叩き始めた。明德はひるむかのように一、二歩下がった。しかし、そこで踏み止まって視線をじっと子どもたちに向けていた。その態度が子どもたちには気にくわかったのだろう。嵩にかかって悪態をつき始めた。明德はさらに後退りした。子どもたちは、しかし、それ以上追い打ちを掛けようとはせず、またメンコに熱中した。子どもたちの微妙な距離間であった。もし、子どもたちが「もう一押し」とばかりに一斉にのしり始めたならばさすがの明德も自宅に帰りざるを得なかったろう。からかいやいじめの対象が消えるということは、退屈であり、おもしろくないことでもあった。従ってこの微妙な距離間というものはいじめの加害者の悪知恵でもあった。明德はこの微妙な距離感によりその場に居続けることができたのであった。

薄青い空の色が高く一面に広がる三月半ば頃であった。雪に輝く蔵王おろしの風はまだ冷たかった。しかし、耳をそばだてるとほのかに春の気配を含んでいることが感ぜられた。陽光は一段と光を増し、椿の葉に照り返っていた。時折、モズの鋭い鳴き声が空を切り裂いていた。椿の葉の緑はその深さを増し、むしる黒黒と見え、赤い花は盛りで

あった。クローバーの葉の形に盛り上がった樹影のあいだ、間から見え隠れする花々は風に揺れ、ひっそりと息つかいをしていかに見えた。そして、深緑色の葉陰から顔を

出している赤は妖艶ですらあった。その赤い椿の木の下に五人の子どもたちが集まっていた。相変わらず明徳はその輪の外にいた。

「今日は何すつぺが」

貞男は軽く握った右こぶしで鼻をこすりながら言った。手の指には春が近いと言うのにまだあかざれがあった。貞男は賀津彦の一学年上の五年生である。

「昨日の続きで爆撃ごっこすつぺや」

一番年長でリーダー核の恒雄が当然のように応えた。恒男は六年生ながらに家事や田畑の力仕事もこなす孝行息子であった。父親はビルマのジャングルの中で戦死してしまつた。いつも折り返しのある学生服を着ていた。その服は袖も丈もつんつるで、ところどころ継当てがしてあった。しかし、こんなことは何も恒雄だけのことではなかつた。多かれ少なかれどの子どもにも共通したことであつた。「始めるぞ」という恒雄の掛け声で子どもたちは一斉に木に取り付いた。灰色の樹皮は滑りやすい。しかも地上から二メートル近くの幹の部分の手がかりとなる枝は生えてい

ない。更に幹は子どもたちの腕の二抱えほどもある大木である。しかし、子どもたちはそんなことはお構いなしに上手な者から順に木に取り付くとなんなく登つていった。そして、それぞれが決めてある専用の枝である「爆撃機」に「着座」した。それらは仲間内の序列に準じて一番機、二番機と命名されていた。隊長は当然ながら恒雄であつた。賀津彦は三番機であつた。

「みんな準備完了したか。それでは発進」

隊長である恒雄の号令で四人の子どもたちは一斉に枝を揺らし、ブーンとかゴーツとかのエンジン音を口に出している。

「今日の爆撃はどこですか。隊長どの」

貞男はすつかりその気になつてゐる。

「今日の爆撃は閑上沖だ。敵艦隊を爆撃し、上陸を阻止する。」

恒雄は恒雄でもうすつかり隊長気取りである。「閑上」

は子どもたちが海水浴やハゼ釣りなどでよく行く浜である。「隊長、敵機来襲です」

「どこだ」という恒雄の声に、貞男が指差した方角に真っ黒なカラスが数羽、電線の上で辺りを見回していた。逆光がカラスの鋭いくちばしを鮮明に浮き上がらせていた。

「敵機発見、護衛機だ。グラマン戦闘機だ。よく狙つて。よつし射撃開始」

恒雄の声に全員が「ダ、ダ、ダ、ダッ」と声を張り上げ、枝を揺らした。椿の花が幾つも独楽のように回転しながら落下していった。

電線のカラスたちは子どもたちの大声に驚いたのか鈍い羽ばたき音を響かせ飛び立っていった。

「敵機撃墜」

賀津彦と透が調子を合わせて来る。

「ようしや、みんなよぐやつた。次は爆撃の目標地点に急ぐぞ」

恒雄は右手を高く挙げるとぐるぐると回した。次いでその拳の親指を立てると今度は下に向けて激しく上下させながら再び大声を上げた。

「明徳、今日はおめえも仲間に入れてやつからそこにじつとすてる」

滅多にない呼びかけに明徳の沈んでいた顔がパツと上がった。その顔が喜びにほころんでいた。

「おい、みんな、閑上沖の目標は敵艦隊と上陸用舟艇だからな。今回は明徳が敵艦隊だ。目標を違わないようにしっかりと攻撃するんだぞ」

そして、「左旋回」と叫んだ。

他の子どもたちは恒雄にならつて一斉に身体を左に傾けた。木の下の明徳は恒雄の言葉がよく聞こえなかつたのか顔を上げたまま恒雄の言葉を待っていた。それに合わせるかのように「敵艦隊頭上に到着、爆弾投下」と叫んだ。そして、花をちぎり取ると明徳めがけて投げつけた。それを真似て他の子どもたちも花をもぎ取ると腕を振り、花を投げた。突然のことであつたが、明徳はひらりと身をかわした。思ひの外明徳は敏捷であつた。

「明徳、逃げたらだめだ。じつとすてる」

恒雄の声に明徳は金縛りにあつたように動かなくなった。明徳の頭や肩にいくつかの花が当たり、花びらがひらひらと舞うように地面に落ちた。そして、明徳の周りにはたちまち花だらけになつていった。花びらが無残にもげているものもある。深い冠のような花の中心にある花糸はまるで生き物の内蔵のように見えた。

「明徳、おめえは直撃弾が命中して轟沈だ。そこに倒れる」

樹木の間から恒雄の声が響く。「倒れる、倒れる」と子どもたちの声が続く。明徳はその声に押されるようにごろりと地面に倒れこんだ。しかし、仰向きの姿勢は落ち着か

ないものである。ましてや日頃いじめている者たちの視線に無防備に腹部を晒すことには危険を感じた。さりとしてガキ大将の恒雄の命令に背くことはできない。明徳はどう身を処置したらよいか決めかねていた。仕方なく明徳はぎこちなく胸の上で手を組み、そして目を瞑った。花の押し潰される感触、土の冷たさが薄い上着を通し背中中の皮膚に感じられた。

「明徳、よぐやった。偉いぞ」

恒雄の甲高い声が響いた。恒雄からこんな暖かい言葉を掛けられたのは初めてであった。

その声を聞いた瞬間、明徳の口から白い歯がこぼれた。地面の冷たさも飛んでしまった。「ようやく仲間に入れてもらえた」と、うれしさが込み上げてきた。

「さあ、わが編隊は次の攻撃目標に向かうぞ」

恒雄の喜色の浮かんだ顔が椿の葉の向こうに見えた。明徳は恒雄も笑顔なのがうれしくてたまらなかった。その笑顔を見ながら他の子どもたちも自分を受け入れてくれた、と明徳は思った。

その時であった。

「こらあつ、うちの息子に何すてんだ」

顔を真っ赤にし、大声を上げながら速足で近づいて来る

男がいた。痩せて長身で、首に手拭いを巻き、手にはシャベルとツルハシがあった。明徳の父、金春さんだった。

「明徳、起きろ」

金春さんの声は驚くほど大きかった。その声に弾かれたように明徳はびよこんと起き上がった。

「明徳、恥ずかしいことはするな」

金春さんは再び大声を上げ、椿の木の下に来ると手にしたツルハシとシャベルを根元がけて投げつけた。カチャーンという金属のぶつかり合う音が響いた。まるで金春さんの怒りのようだった。

子どもたちは金春さんの大声ばかりでなく、シャベルとツルハシのぶつかる金属音に気圧された。そして、恐怖心にさえ襲われた。金春さんが今にも木に登って来て自分たちを叩き落すのではないかとさえ思った。しかし、それは杞憂ではあった。

金春さんは土木作業員をしていた。この日は何かの都合で早仕舞いをしての帰りのようだった。

「キミタチハ トウシテイツモ明徳ワイジメテイルノタ。明徳ガ ナニカワルイコトモシタノカ」

先ほどの怒気を含んだ声ではなかった。子どもたちに言い聞かせるような穏やかな口調に変わっていた。子どもた

ちはほつとすると同時に恥ずかしさに襲われた。賀津彦は金春さんの言った「きみたち」という言葉にはつととなった。いつも「おめえ」とか「ガキども」と口汚く呼ばれている

ことに慣れている身に、この言葉は新鮮で、おしゃれに聞こえた。他の子たちにとつても同様だったに違いない。賀津彦は母が言った「金春さんは昔の中学校を卒業しているんだ」という言葉を思い出し、その言葉遣いに納得した。

と同時に、その思いに反し、金春さんの濁音抜き言い方におかしみが込み上げてきた。一度笑いが起こると抑えが効かなくなる。そして、このような類の笑いは周りに伝播していく。両手で口を必死に押さえている子もいた。子どもたちは金春さんにすぐに謝れば大事には至らないことを重々承知していたはずである。しかし、どこかに金春さんを見くびるところがあったのであろう。だが、他方で金春さんの怒りが爆発しまいかと、恐れてもいたのも確かであった。ところが金春さんは違っていた。

「キミタチ、オトナカマチメニ話ヲシテイルノニトウシテキチント聞キカナイノカ。日本人トシテ恥ツカシクナイノカ」

金春さんは怒るところ穏やかな、そして静かな口調で語り聞かせてきたのである。その落ち着いた口調に、逆に子

どもたちは尋常でないものを感じ取り、一瞬に笑いが消えた。全く予想外であったのである。

賀津彦には金春さんの優しい口調のほかもう一つ驚いたことがあった。それは「日本人として恥ずかしくはないか」という表現であった。初めて聞く言葉であった。その言葉は強烈に胸を衝いた。そして、何か尊いものに聞こえ、肅然とさせられた。

当時、敗戦からまだ十一年ほどしか経っていない時期であった。戦争の爪跡は人々の心になお深く刻み込まれていた。賀津彦の父の叔父、父よりわずか二歳しか年長でないその叔父は満州で行方不明、弟はビルマのジャングルで飢えと病を何とか切り抜けて骨と皮ばかりで敗戦から二年後に帰還、長兄は肺貫通の重傷で何とか生き永らえていた。村落には何人もの戦死者がいた。賀津彦の父も行方不明の叔父の消息を求め、時折叔父の戦友たちを訪ねたりしていた。とても戦後が終わったとは言えない状況であった。現に恒雄の父親もビルマの密林で戦死している。一家の大黒柱を失った恒雄の家族は五反歩ばかりの田畑を耕してのその日暮らしてであった。従って戦争に対する腹立ち、戦争を主導した者たちへの憎しみは、村落の人々の心の奥底に張り付いたままであった。この癒やし難い怒りや憎しみが日

の丸国旗や、君が代国歌に向かったのはごく自然なことであつた。賀津彦たちが通つた小学校でも祝日に国旗を掲揚することも儀式や朝会で国家を歌うこともなかった。村内でも旗日はたひ（祝日）に国旗を掲揚する家は本当にわずかであつた。戦時中には考えられないことであつた。

賀津彦は「日本人として誇りを持って」などというおとなは、学校の先生も含み一人として知らなかった。他の子どもたちも同様であつた。例え学校で教えられたとしてもにわかには信じられなかっただろう。なぜなら、鬼、畜生と蔑んでいたアメリカ兵がばらまくコロレートやチューインガムを嬉々として拾い、またアメリカ兵の腕に赤いルージュを引いた女性がぶら下がっているのを日常の風景としていたからである。そんな経験や目撃を持つ子どもたちには「誇り」を強いたとしても所詮無理なことであつたろう。少し聡い子であれば現実との食い違いはすぐに見破るし、高学年の子の中には、またおとなが不相応な大気炎を吐いている、とさえ思う子もいたに違いない。

しかし、金春さんが言うとなるとその趣は全く変わってしまう。金春さんは日本に併合された朝鮮の国民であつたし、賀津彦たち子どもたちにさえ偏見や差別を持たれた人である。この日本国民から虐げられている人が事もあろう

に日本を「誇りある国」と褒め称えるとさえとれる言い方をしたのである。

金春さんが言う「日本人」という語感は今までとは違い晴れがましく、凛々しさが感ぜられた。賀津彦の驚きは大きかつた。そして「凄いいことを言うおとながいるものだ」と、金春さんの見上げる顔をしみじみと見入つた。この金春さんの言葉は生涯、賀津彦の記憶から消えることなかつたのである。

この時の賀津彦の心理状態を表現するとしたならば「面喰らう」という言葉が最も適切であつたろう。とんでもない方向から予想もしないパンチが顔を襲つた、そんな驚愕である。賀津彦の顔から笑いが消え、肅然たる気持ちになつていった。

「きみたちはまだ知らないかもしれない。また、例え知つていたとしても理解できないと思うが、人間にとつて一番大切なものは誇りだよ。自分や自分の国を大切に思い、他のだれにも負けないで胸を張つて自慢にできることだ。朝鮮人は朝鮮人の、日本人には日本人の誇りがある。それをなくしたら人ではなくなるほどの大切なものさ。生きる価値と言つてもいいよ。それ故その誇りを傷付けられることは一番の恥じになるんだよ。だから誇りを傷つけるような

あつたと言えた。

賀津彦は金春さんの「明德をひどく傷付けた」という言葉に、実はどきりとなつた。常日頃から母親に「明德と仲良くしないといけないよ。決していじめたりしてはだめだよ」と口酸っぱく言われていた。はつとなつてそのことを思い出したのである。もしも金春さんがこのことを母親に言いつけたら小言では済まないに違いない。「金春さん、どうかしゃべらないで」と、心の中で祈つた。そして、視線を金春さんに向けた。

その視線を感じたのか、金春さんは賀津彦の方角に顔を上げた。そして、「それに」と、一呼吸を置き、首に巻いた手拭いをほどくとその手拭いでつるりと顔を拭つた。賀津彦はまるで自分の顔を拭かれたような気がした。思わず両の手を顔にやつてしまった。

冷たい風の中にもかかわらず、金春さんうっすらと汗をかいていたのであつた。拭いた白い手拭いに薄茶色のしみができていた。汗を拭いたせいかわ、金春さんの日に焼けた顔に生気が戻つて来たようであつた。その顔に、西の空に傾きつたあつた陽が当たっていた。それを見て、賀津彦の肩の辺りの緊張感がほぐれていくのを感じた。

「朝鮮人も日本人も同じ米の飯を食つて生きてるんだ。

ことをしてはいけないんだ。分かるね。きみたちが先ほどうちの明德にしたことは明德の誇りをひどく傷つけたんだよ。しかし、本当は明德以上にきみたちの心が傷ついているはずだよ。なぜならきみたちがやったことは人の道に外れた恥ずかしい行いだからだ。きみたちのうちのひとりでも自分がやったことを胸を張つて大声で『ぼくは正しいことをしました』と言えるかね。言えないだろう。それはきみたちの心の中に良心というものがあるからだ。誇りを持つことと良心に恥じないということは裏と表の関係なんだ。良心に恥じないということは誇りが持てたということだ。このことをどうか忘れないでほしいんだよ」

朝鮮なまりを除くと金春さんの話はこんなふうであつた。金春さんの顔は話を進めるうちに赤みを帯びていった。話し終えたとき「ふーっ」と大きく、長い息が漏れた。

子どもたちはそんな金春さんの顔をじつと見詰め、そして互いの顔を見合わせた。三年生の岩男は頭を小さく横に振つた。「分からない」という彼なりのサインであつた。しかし、金春さんの真剣な、そして厳しい表情、語調からただ事ではないくらいのことには十分に理解できたに違いなかった。そのことは他の子どもたちも同様であつた。このことだけでも金春さんの話は子どもたちには十分な価値が

それにこの二つの国は二千年も前から関わり合いを持って来ている隣の国同士、違いも多いけれど他の国に比べれば似ていることが沢山あるんだよ。こんな二つの国に住む人々は仲良くしていかないと。仲良くすることが大事だよ」

金春さんは「ナカヨク」という言葉に力を込めた。

賀津彦は金春さんはどうしてこんなに熱心に話し掛けて来るのだろうかと思えた。そんな賀津彦の疑問が聞こえたかのように金春さんは再び話し始めた。

「いいか、きみたち。私たちは仲良くできないはずはないんだ。仲良くなれば相手の良さが分かるし、良さが分かれば争いの種はなくなる。争いがどんなに人々を苦しめ不幸にしたかきみたちにも分かるだろう。今度の戦争の中でよその国の人々からその国の言葉や名前、それに土地を奪ったりしたことがあった。しかし、そういうことは二度としてはならないんだ。きみたち子どもたちがどの国の人々とも仲良くし、尊敬し合い、平和に暮らしていける世の中を作っていかなくてはならないんだよ」

金春さんは言い終わると、地面に散らばっている花を一つ拾い、そしてその香りをかいだ。金春さんの目が細くなり、静かに息を吸っていた。穏やかな表情であった。

賀津彦は、金春さんが朝鮮語なまりで「ナカヨク」と言

う度に心臓がどきりと鳴った。そして「申し訳ない」という気持ちで明德に、そして母親に対し湧いて来た。

「私たちはいつまで日本にいられるか分からない。いる間、どうか明德を仲間に入れて仲良くしてやってくれ。お願いするね」

そう言うと、金春さんはばんばんと手拭いでズボンの埃を払い落としした。そして、ツルハシとシャベルを拾った。この二つの道具はよく手入れされており、シャベルの金属部分が日の光を受け、きらりと光った。

「ごめんなさい」

恒雄が立ち去ろうとしている金春さんの背中に向かって小さい声で言った。他の子どもたちもそれに続いた。誰もが金春さんのなまりを茶化すことなく真剣に聞いていたのであった。金春さんの子どもたちを思う真摯な態度に心打たれたに違いない。賀津彦も「ごめんなさい」と言いながら「あれっ」と思った。金春さんの「いつまで日本にいられるか分からない」と言う言葉に引かかったのである。

「どこかよそに引越すのだろうか」

その疑問を金春さんに尋ねたかったが、何かおそろしいような言葉が金春さんの口から出てきそうに聞けなかった。

「ア리카トウ、ヨロシク頼ムネ」

金春さんは軽く頭を下げた。

その金春さんの様子に子どもたちは顔を見合わせた。その顔には怪訝な表情が浮かんでいた。おとなが子どもにも「ありがとう」と返すことや頭を下げるなどということは滅多になかったからである。恒雄も目を丸くしている。やはり驚いたのである。

「椿ノ花カキレイタネ。サア明德、一緒ニ家へ帰ロウ。オカチャン、待ッテイルヨ」

金春さんは軽く明德の背中を押した。明德は振り返り、振り返り畑道を帰って行った。そして、角を曲がる寸前に右手を挙げ、その手を振った。遠くから蒸気機関車の汽笛が鋭く、長く聞こえて来た。子どもたちは枝に腰を下ろしたまま二人の姿が見えなくなるまで見送った。見送っているときも見送った後も子どもたちは無口であった。蔵王の山並みに影が落ちて来たのだろうか銀嶺の白さが薄く、灰色になつていった。

「みんな今日はお仕舞いにすつべ。また明日ここに集合だ。みんな気をつけてな」

沈黙に我慢がでなかつたのだろう。恒雄が声を上げた。しかし、恒雄のその声は心なしか沈んでいるようだった。しかも「気をつけてな」と仲間への気遣いまでしていた。

これもまた滅多にないことであった。子どもたちは「うん」と素直に頷くと木から降りていった。そしてそれぞれの家に向かった。賀津彦の家の前には蒸気機関車用燃料の豆練炭製造工場の煙突からは、茶色がかつた煙が力強く

もくもくと噴き上がり、工場の中からはまるで巨大な怪物が吐くような白い息が、雲のように吹きだしていた。まだ明るいのには工場の外灯は全て点灯されており、夜を徹しての稼働を暗示していた。

「さ、今晩はうめえものがあるぞ」

台所で夕食の片付けを終えた賀津彦の母の由美が、白い布で覆われたお盆を大事そうに両手で持って来た。子どもたちの視線が盛り上がった布巾へ一斉に集中した。

「何っしや」

最初に声を上げたのは賀津彦であった。

「何、何」

妹たちもうれしそうに声を上げる。

「春香、お茶淹れて。今日、長町のおばちゃんのに寄つたらうめいものもらって来たんだ」

長女で一年生の春香はスキップしながら台所へ向かった。由美は炬燵の上に置いたお盆の布巾を両手でそろそろと引

き上げた。

「うわあ、ナマガシだ」

末の妹の望の聲が弾んでいる。

長町のおばちゃんとは父の姉で、市電の走る商店街でお菓子の卸と小売りを生業としている。時折欠けて売り物にならなくなった煎餅などをくれた。また、クリスマスにはデコレーションケーキを必ず届けてくれた。これは当時、最大のご馳走であり、村内でケーキを食べる家庭は少なかった。「ナマガシ」とは生菓子で和菓子のことである。何かの拍子で傷がついたり、形が崩れて売り物にならなかったものを母親に与えてくれたのだろう。

由美はその生菓子を丁寧小皿に移すと「さあ、どれがいいかはじゃんけんで決めるよ」と言った。食い意地の張った賀津彦への予防措置であった。子どもたちはひとしきりワイワイと言いなながら選ぶ順序を決めた。末の妹の望が偶然にも一番になったのだが、四歳という幼さが選ぶのに戸惑っていた。賀津彦は二番目の自分が早く選びたいものだから「望、この白いふんわかしたのが一番うまそうだよ」とせかした。望は兄の進めに素直に従った。賀津彦が狙っていたウメを模した薄いピンク色の菓子は、無事に賀津彦のものとなった。

えた。全部食べてしまうのがもったいないような気がした。妹たちも「うまいね、うまいね」、「あまっこいね」と、口々に言い合っていた。炬燵の台の上は幸せに満ちていた。由美が「とうさんの分も取っておこうね」と言いながら残った一個を別な皿に移した。父親は夜勤のため不在であった。

騒ぎに驚いたのか炬燵の中で寝ていたトラが掛け布団の裾を鼻先で押し上げながら顔を出した。そして大きなあくびをした後、「ニヤーゴ」と鳴きながら炬燵のテーブルの端に前足を掛けた。

「トラもナマガシ欲しいのか」

家族で一番トラを可愛がっている春香が声を掛けた。それに応えるかのようにまた「ニヤーゴ」とトラは鳴いた。春香は指先にアンを付け、トラの鼻先へ持つて行った。トラはフン、フンと二度ほど鼻を鳴らすとぷいと顔を背けた。「なんだっぺ、こんなうまいもの嫌がるなんてトラは贅沢だ」

春香が口をとんがらせて言うと、ほかのみんなも「ぜいたくトラ」と口々に囁き立てた。びっくりしたトラは台所へ走っていった。それを見ていた家族は大笑いをし、その笑い声は部屋中に満ちた。

この当時、甘い物と言えば砂糖であったがこの砂糖さえまだまだ貴重品扱いであった。冬の寒い晩、砂糖にお湯を足した「砂糖湯」がご馳走だった。こんな状況の中で子どもたちが口にできる甘い物と言えば紙芝居屋の水飴であった。紙芝居の見料は水飴込みで五円であった。そのほかにカバヤのキャラメルが駄菓子屋で売られ始めた。当時十円であった。このキャラメルを一箱買うと中には「文庫券」が一枚入っていた。この文庫券50点でカバヤ文庫が一冊もらえる仕組みであった。文庫券はラッキーカードが50点、その他にもボーナス券があった。しかし、この十円が子どもたちには高嶺の花であった。賀津彦も本が好きで時折このキャラメルを買っていたが、そう度々は買えなかった。従って、50点を集めるのは容易ではなく、本と交換することはなかった。総じて賀津彦の仲間の子どもたちは、紙芝居屋の水飴でその甘味への飢えを満たしていた。しかし、この五円の見料さえ都合できない子どもたちもいたのである。

賀津彦は生菓子の入った小皿を引き寄せると、慎重にホークを入れて一口一口をゆつくりと噛みしめた。頬の筋肉が知らずにほころんでいた。もったりとした甘さが口いっぱいに広がった。この薄桃色の生菓子が椿の花のように思

賀津彦は生菓子を食べ終わると、日中の出来事を思い出した。幸い金春さんは母親に何も言いつけなかったようだった。賀津彦は安心したが急にあの金春さんの言葉に抱いた疑問が膨らんできた。そしてこの疑問を胸の中に収めておくことができなくなった。

「かあちゃん、明德本当に引越すの」

「急に何言うんだよ」

母親は口にくわえたホークの動きを止め、賀津彦に顔を向けた。

「昼間ね、明德のとうちゃんが『いつまで日本にいるかわかんねえ』と言ったんだ。おれ、もしかしたら明德たち引越すのかと思っつしや」

「ああ、そのことか。まだわがんねえけど」

由美は口を濁し、くわえたホークを皿の端に置いた。カチャリと音がした。

「賀津彦はおしやべりだからな」

由美は独り言のようにつぶやいた。彼女の口の端の筋肉が少し緩んだ。

「かあちゃん、何が知っているんだべつしや。知っていたら本当のこと教えてけさい。おれ絶対にだれにもしやべんねえがら」

賀津彦は向きになって言った。妹たちは怪訝そうに賀津彦を見詰めている。

由美は残った四分の一ほどの生菓子を再びホークで刺すと口に運んだ。ゆっくりと噛み、それを静かに飲み込んだ。由美の喉が少し膨らみ、その膨らみが喉の下へと移動していった。再びホークを皿に置くとしばらく沈黙した。賀津彦は何か別な生き物が喉を通して母親の体内に入っていくような錯覚をした。

「絶対内緒だぞ」

由美は強い調子で言った。

「わがっている。おれ、お明さんに誓うがら」

賀津彦のいうお明さんとは庭の南西の隅に祀つてある小さな祠のことである。信心深い由美は日に一回はご飯などのお供えをしていた。この「明神さんに誓う」は由美の口癖である。その母親の口癖がいつの間にか賀津彦にも移ってしまったのだ。

「明徳とこの香ちゃんかな、三日ばかり前に家に来てそのことしゃべっていったんだ」

由美はいかにも言いたくなさそうに重い口調で語り始めた。

「それで何ていったのっしや」

賀津彦は身を乗り出さんばかりの勢いであった。

「そんな慌てることねえべ」

由美はゆっくりと話し始めた。

最も心配し、気掛かりなことは息子の明徳のことだといふ。そのうち良くなるだろうと思っていたのだが、いつまで経っても明徳は遊び仲間に入れてもらえない。それどころか「チョウセン」とか「センジン」とか「ハントウ」と囃し立てられ笑いものにされ、その上いじめもされている。そのことが一番の心配ごとだと。「そして」と続けた。

「香さんはね」と言つて少し考えるように、そこで話を止めた。

「日本にいても生活は楽にならない。むしろ苦しくなる一方である。しかも、明徳はいつまで経つても朝鮮人扱いで仲間はずれ。先行きを考えると気持ちが暗くなるばかりだ」

そして、涙を流したという。

「『明徳と遊んでやれよ』と、いつも賀津彦に言っているだろう。それなのにどうして仲間はずれにしているんだ。まさかおめえがいじめの先頭に立つてんじやねえだろうね」

母はきつい目で賀津彦を睨んだ。賀津彦は逃げるように

母親の視線を逸らした。母の言葉に何も反論できず、俯くしかなかった。

「それに香ちゃんね」と、一息をついて言葉を繋いだ。

香さんは由美と同級生であった。同じ同級生でも香さんは常に学級で一番の成績であった。しかも向学心に燃えていた。当時、村落では由美を含め多くの子どもたちは尋常小学校で学業を終えるのが常であった。ましてや「おなごに学問はいらねえ」というのが当時の村の風潮であった。そんな中にもあつても香さんはその向学心を満たすために高等小学校への進級を希望していた。この志を知った彼女の父親は、祖父母の反対を押し切り彼女の熱望を実現させてくれたのであった。香さんはそこでも大変優秀で、担任は女子師範学校進学を強く勧めてくれた。師範学校は授業料が無料であり、卒業後の就職先も保障されていたからである。が、やはり高等小学校までが限界であった。女手は家事でも農作業でも欠かせなかった。むしろ喉から手が出るほどであった。そんな状況で、十分な働き手である香さんに「ただ飯」させている訳にはいかなかった。しかも目に見えない、実態のないはずの世間体というものを年寄りであればあるほど気にしていた。

「香さんはいつとも小説を読んでいたねえ。そんな香さんを

みんなは敬遠していたけど、私とはウマがあつてね、仲良くしていたんだよ」

由美は懐かしむように少し声を落とした。そして、目をしばたかかせながら言葉を繋いだ。

「もぞいなあ（かわいそうだ）、あんなに頭が良い香さんが親との縁まで切つて金春さんと一緒になつたなんて、まるで苦労を買つてでたようなもんだべや。ほんとにもぞこいこつた」

二度繰り返した「もぞこい」に由美の真情がこもっていた。まるで自分の姉妹の身の上を嘆くかのような口調であった。

「器量も良いし、頭がよかつた人だから嫁御の口は降るほどあつたのに、よりよつてなんで『チョウセンジン』などと一緒になつたのがなあ、いだますい（惜しい）、いだますい。人つてわがんねえもんだ」

今度は憐れむふうであった。由美は香さんの無念さが乗り移つたかのように大きく嘆息した。

「香さんは昔から心根のやさしい人だったから金春さんの境遇に同情すてすまつたのがなあ。そう言えば金春さんのことを聞いたらこんなこと言つていたよ」

由美は賀津彦をまるで一人前のように扱つて話す風で

あった。おしゃべり好きの母は、時に話し始めると止まる
ことがなかった。多分、このときは他言をしない約束をし
た者であればだれでもよかったのかも知れない。

由美は三日前に香と話し合ったことを思い出した。
「多くの朝鮮人がそうであったように、彼も死ぬほど苦勞
をして来た人なのよ。そんな境遇であったけれど、根っか
らの読書好き、勉強好きで身近にある本を片端しから読ん
でいたらしいのよ。これは彼が酔ったときに洩らした言葉
だけだね。そのうち彼の向学心は止み難くなってきた、と
いうの。これは私にも経験があったからとても分かるのよ。
するとそんな彼を応援してくれる親族が現れて、幸運にも
中学校へ入学できたわけ。中学校卒業後は高等学校へ進学
したかったらしいけど親族の支援はここまでで、泣く泣く
進学を諦めたのよ」

香の金春さんを話す口調には熱がこもっているように聞
こえた。

「まるで境遇が香さんと同じだ」と、由美は思った。そし
て「やはり香さんは金春さんに同情し、それで結婚に至っ
たのだ」と確信した。しかし由美はそんなことをおくびに
も出さず、

とができなくなっていた。、香の顔を窺いながらさらに問
いかけた。

「うちの、好きで日本に来た訳ではないのよ。私も以前、
そのことを聞いたことがあるの。そしたら彼は苦い顔をし
たわ。あまり言いたくなかったみたい。でも、私もそのこ
とはどうしてもはっきりさせておきたかったので重ねて聞
いたのよ。そうしたら彼は詳しい話などせず、彼の祖国の
民謡を聞かせてくれたわ。日本の浪曲のような、講談のよ
うな節回しよ。悲しみや苦しみが身体に染み入ってくるよ
うな歌なの。これをきっかけにこの後、事あるたびにこの
歌を聞かせてくれるようになったの。お陰で私もすっかり
覚えてしまったわ」

そう言うと、香は幾分姿勢を正し、小さくつぶやくよう
に朝鮮語で歌いだした。歌い終わると日本語に訳してくれ
た。

口の利ける野郎は 監獄に

野良に出る奴ア 共同墓地に

餓鬼の一匹も生める女つちよは 色街に

畚の担げる若え野郎は 日本に、

こんで何にもかんでも素つかからかんよ

「金春さんはどうして日本にきたのっしや。金春さんが来
なければ香ちゃんは日本人と結婚できたはずなのに」

この香の結婚の動機は由美の最も大きな関心事であった。
しかし、いくら親友といっても香の心の機微にふれること
はおいそれとは口に出せず、今日までに至っていた。由美
は「今がチャンス」とばかりに口にしたのであった。

「由美さん」、香は語気を強めた。

「あまり日本人とか朝鮮人とか言わないで。人が人を好き
になるのに国籍とか人種なんて考えないし、関係もないと
私は思うのよ。どうか私を不幸な女と見ないで。お金の苦
勞は尽きないけど、私は好きな人、尊敬できる人と結婚で
きて幸せなのよ」

上気した香の頬がほんのりと紅く染まってきた。

「香さんごめんね。私、朝鮮の人を悪く言ってしまったみ
たいで」

由美は素直に謝った。

「金春さんっていい人だと思ってるのよ。香さんにも明
徳ちゃんにもやさしいし、家のこともよくやってるみたい
だし、うらやましいわ、これ本当よ。それで金春さんはど
うして日本に来るようになった訳」

由美は話が進むにつれ、年来の疑問を抑え込んでおくこ

八間新道のアカシア並木 自動車の風に浮かれて
いる。

(金素雲編『朝鮮民謡選』岩波文庫より)

「さつき、私はこの歌は悲しみ、苦しみが満ちていると
いったけど、それだけじゃないのよ。悲しみを悲しみとす
るだけではなく、その奥底に乾いた笑い、また辛辣な風刺
が潜んでいるのよ。朝鮮民族のしたたかさ、強さよ」

由美は香の話に領きながら流れる涙を抑えきれなかった。
そして、香さんと金春さんは本当に好き合っているんだ、
と思った。当時、村落で由美自身はもちろんのこと、「愛
し、尊敬できる」人と結婚した友人や知り合いはまるで皆
無であった。それだけに香のことをまぶしく、そして二人
のことは由美にはうらやましく思えた。

「結局、彼はもっこ担げる若い野郎だったから日本に来た
のよ。勿論、そればかりでなかったの。中学校を卒業でき
ても祖国では満足な仕事には就けず、日本人の下働きのよ
うな仕事しかなかったのよ。そんな折に日本でなら大金が
稼げるという甘い口車に乗せられて日本に来たというわけ
よ。その挙句、秋田の鉾山に送り込まれ、骨と皮ばかりに
なるまでこき使われたの。死ぬかと思ったそうだけど日本

が戦争に敗れて助かり、伝を頼って仙台まで逃げて来たというわけ。当初はレンガ工場近くの同胞部落に住んでいたけど、あの人まつすぐな人でしよう。部落のリーダーたちと衝突することが多く、そこを出ざるを得なかったのよ。どちらかという追いつけられなかったというのが正しいらしいけど」

由美は「同胞部落」と聞いて「朝鮮人部落」のことだとすぐに合点がいった。さっかけの家が立ち並び、その中で人々は寄り添うように生活をしていた。村内では「チョウウセンブラク」で通っていた。村人はよほどのことがない限りそこには近寄ることはなかった。子どもたちもおとなの影響を受け、「怖いところ」という認識を植え付けられていた。

「それでどうやって金春さんと知り合ったの」

好奇心丸出しの言い方に、由美は思わず下を向いてしまった。しかし、香は由美の思いなど気にする様子にはなかった。

「実はね、彼は前から祖国帰還の運動をしていたのよ。もちろん、その中で民族差別の問題についても勉強していて日本人も何人か参加していたのよ。その日本人の中に高等小学校の友人がいてその彼女に誘われ、私も参加するよう

う」

差別の話を出されるとさすがに由美は反論できなかった。また、この話に深入りすると二人の友情にヒビが入るのは避けられないと判断した由美は「そうね」と軽く頷いた。

しかし、香は抑え続けていたものを途中で止めることはできなかったたのである。

「軍国主義が終わり、民主主義になったはずなのよ。日本国憲法に『すべて国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別』などで『差別されない』とあるのよ。それなのに現実はこちらと全く反対なことが行われているでしょう。相変わらず朝鮮人に対する差別はひどくなっているのよ。しかも、私の両親までもよ。悔しいわ、悲しいわ」

香は目を押さえた。うなだれた肩が細かく震えていた。

香さんは夫の金春さんと何日も話し合い先の見えない日本を去り、「地上の楽園」と喧伝されていた北朝鮮に帰還する決断をくだした。金春さんの決心は随分と前に定まっていた。しかし、香さんは祖国日本を捨てて体制の異なる北朝鮮に行く決断はなかなかできなかった。最後に彼女を押ししたのはやはり明德のいじめであった。受け入れてくれない祖国に拘泥していても未来はないと判断したのである。

になったわけ。そこで金春さんに出会ったの」

「ふーん、成るほどね。そこで恋に陥ったというわけね」

「そんな簡単じゃないわよ」

「いろいろ複雑だったということね」

「ほか、由美」

二人は顔を見合わせて初めて声を出して笑った。

その笑顔が話に弾みをつけたようだ。真顔に戻った由美は香に話の続きを促した。

「それで知識豊富な金春さんからどんなことを教えてもらったの」

「彼が主宰する学習会で、彼や彼の友人たちから民主主義のこと、男女平等、それに民族差別などについて学んだわ。特に韓国併合がどんなに朝鮮の人民を苦しめ、傷つけたかを初めて知ったの。日本人の朝鮮人差別は昨日今日始まったのではなく、歴史的な背景があることも知ったのよ」

「朝鮮の人たちを苦しめたのは確かだと思うけど、日本は朝鮮のため随分と力を貸したんじゃないの」

「でも戦後十年も経って、なお差別や人権無視が続いているでしょう。明德がその例よ。日本人が朝鮮人を本当に助けたなら、こんな差別など今まで続くはずはないでしょ

国造りにいそむ若く、希望溢れる北朝鮮なら明德も生き生きと暮らせるだろう、と判断したのであった。

「賀津彦には難しい話だったろう。しかし、香さんや金春さんがどんなに苦しんで北朝鮮に帰る決心をしたかぐらいは分かるだろう。それを考えたら明德をいじめることなどできないだろう。分かったな」

母親の真剣な表情を見て賀津彦はさすがに頷かざるを得なかった。しかし、母の言葉を十分に理解した訳ではなかった。「それにしても」と、賀津彦は思った。「やっぱりおれたちが明德をいじめたことが一番の原因だったのか」と、それを思うとやはり居たたまれない気持ちになった。そして、明德たち家族が帰る北朝鮮はどんな国なのだろうかと想像を巡らすのだった。

明德一家は、十二月に第一次帰国船で新潟港を発つ予定であるという。まだ八カ月も先のことである。しかし、賀津彦は明德と直ぐにでも別れるような気持ちになった。心の中を木枯らしが吹き抜けていくような寂しさに襲われた。賀津彦は、明日みんなに明德の帰国の話をして一緒に謝ろうと決心した。

北朝鮮は朝鮮民主主義人民共和国というが、賀津彦には

この長い名前がどうしても馴染めず、覚えきれなかった。しかし、明徳の帰国話を契機にこの国に対する興味がわき始めたのも事実であった。

その国ではだれもお腹いっぱい食べられ住む家も整っており、生活上の心配は何もないという。帰国した人々はだれもが大歓迎される。それなら明徳も安心して暮らせる。明徳は「将来に希望のない」日本で、毎日いじめに遭う生活にはおさばらし、快適な生活を送ることができるのだ。賀津彦は「よかった」と思う反面、なぜか羨ましい気持ち湧いて来るのを抑えきれなかった。他方、「明徳を仲間に入れる」という考えがどういうわけか急速にしぼんでいくのを感じた。すると、それに反比例するかのようになり「明徳は地上の楽園でたくさんの友だちができるんだ」という考えが膨らんでいった。しかしまた、「それでもやっぱりいじめたことを謝るべきだ」という別な声が聞こえて来るのだった。

「明日、椿の木の下に早めに明徳を呼んで先におれだけで謝ろう」

迷った挙げ句そう心に決めると、賀津彦の心は少しばかり軽くなっていくのだった。

翌朝、賀津彦は鼻孔に触れる暖かで心地よい気配に目覚

めさせられた。肩や首の辺りのこわばりが全くないのである。その上、昨朝までの部屋全体を包む寒気が全く感じられなかった。賀津彦はほんの一息、息を吸ってみた。口から、そして気管支を通り肺に達した空気は、少しも身体を緊張させなかった。それどころか、乾いた砂が水を吸い込むようにこの柔らかでぬくい気体が身体の隅々まで行き渡っていくような感じがした。

「春だ、春がとうとうやって来たんだ」

賀津彦はそう叫ぶと、賀津彦はがばっと布団からはね起きた。障子のガラス部分を通して入って来る光はまぶしかった。賀津彦は身体の底から力が湧いて来るのを感じ、大きく息を吸い、そして「うーん」と伸びをした。

朝食後早々、賀津彦は明徳の家に向かった。入り口に近づき明徳を呼ぼうとした途端、戸の向こうから家族の笑い合う声が聞こえて来た。賀津彦の足が一瞬止まった。と、さらに明徳の、今まで耳にしたことのないような高く、明るい笑い声が聞こえて来た。実に楽しい声であった。賀津彦はじつとその明るい笑え声に耳を傾けた。そのうちに、賀津彦の心がなぜか沈んで行き、そして不愉快な気分が込み上げて来た。賀津彦はくると踵を返すと足早に明徳の家から離れた。そして、真つ直ぐに椿の木に向かった。も

ちろん、椿の木の下の下にはだれもまだ来てはいなかった。賀津彦は沈んだ気分のまま椿の灰色の幹に両手を掛けた。幹は明け方の冷気を吸い込んでひんやりとしていた。その冷たさが掌から腕、そして全身にと広がっていった。賀津彦はいっぱいに空気を吸い込み、そしてそれを止めると勢いをつけて一気に登った。登り終えると大きく息を吐いた。

その口の前にかすかに白い薄もやが浮き、あつという間に消えた。その消えた息の下から椿の赤い花が二三個真つ直ぐに落ちて行くのが見えた。それを見ながら賀津彦は力を入れ、枝をゆらりと振った。根元が朽ちかけていた花が枝から容易に剥がれ、ばらばらと降り落ちて行った。賀津彦はそれを見下ろしながら蔵王の山が一番良く見える隊長機、恒雄の枝に移り、腰を下ろした。そして大声で「ダッ、ダッ、ダダッ」と、機銃を撃つふりをした。しかし、賀津彦の心の渦は収まらなかった。

「ばかやろう、明徳のばかやろう」

賀津彦は大声でどなった。しかし、その声は次第に小さくなり、消えて行った。

賀津彦の真向かいにはきれいな円錐形の太白山が澄んだ朝の空気の中に、木々の陰影が見えるほどに鮮明に佇立していた。その左斜め上後方には、西の薄青い空と大地を横

一線に断ち切るかのように蔵王の山並みが朝日に輝いていた。賀津彦が崇める蔵王連峰である。山々は未だ雪を抱き、その雪は微かに赤みを帯びていた。彫刻刀で切り裂いたような山巒が山容を一層峻険に見せていた。

蔵王の山並みを見詰めていた賀津彦の心は次第に鎮まっていた。下を見ると、一昨日みんな明徳に投げつけた椿の花と先ほど落下した花とが混じり合って広がっていた。賀津彦は、その花の絨毯に誘われるように椿の木からそろりと降りた。降り終わると両の足を地面に踏ん張り、顔を大きく後ろに反らした。そして、眼前に広がる椿の木に「明日また会おうぜ」とつぶやいた。